

ミラン・クンデラ著 西永良成訳
『ほんとうの私』

集英社

荒このみ

あのミラン・クンデラがフランス語の読みを信頼して直しを求め、作品の内容について意見を求めてくる相手がすぐそばにいるなんて、ミラーの私はそれだけでも舞い上がってしまう。しかもこんどの作品は、翻訳者の語らいがどうも内容にまでだいぶ影響しているらしいと知ると、作家の想像力をかき立てる存在なんてすごいなあとうれしくなってしまう。原題は英語でいえば「アイデンティティ」。わたしがわたしであることであり、わたしの正体という、あまりに根源的すぎて読者の気持ちを呼び起こさない不思議なタイトルだ。

パリに住むひとりの男とひとりの女が登場する。女は五歳になった息子をなくし、それ

がきっかけで夫と別れる。その後に出会うのが自分より数歳若い男で、今は共同暮らしをしている。けれどもそれが未来を含む結婚につながるのではない。

男は女に名前を書かずにそつと手紙を出し、アパルトマンの郵便受けに入れておく。女はその手紙を衣装箆筒にブラジャーの山のなかに隠している。隠された手紙に男は気がついてい。そうやってふたりはお互いに「アイデンティティ」の隠しあいゲームをしている。

あるとき海辺のテラスで男と夕食をしていた女は、強烈な白の中にいる自分に気づく。「テーブル、椅子、テーブルクロス、すべてが白く、街灯も白く塗られ、電灯も夏の、まだ暗くなっていない空に白い光を放射していた。その空では、やはり白い月があたり一面を白くしていた」。するとその白い眩惑のなかで、女には目の前の男が不在になってしまう。男の「アイデンティティ」は消え、男は女の感情のなかで「郷愁」の対象でしかなくなるのだ。「どうしてひとは存在している者の不在に苦しむことができるのか」。

男と別れた女が出ていくのはロンドンの町で、赤い灯がともり赤いカーテンが風に漂う屋敷ではパーティが開かれていた。パリからロンドンまで海底を走る汽車に乗ってこ

の赤い世界へ入って行く。冥府の世界へ下っていくように、「列車は蛇のように」トンネルの中へもぐって行く。かつて女が男の愛情をはじめて感じたとき、女は顔ばかりでなく首も肩も、体のすべてがほてって赤くなってしまう。それは言葉であらわす必要のない男への愛の答えだった。今また海の底の根源を通して、女は男とのかかわりを含む「アイデンティティ」を獲得しようとしているのだろうか。女はまた存在の赤い色合いを帯びるのだろうか。結びの51章は、男と女が並んで寝ている姿を見ている「私」の視点で描かれている。「私」はいったい誰なのか。その正体は。「アイデンティティ」は。クンデラっていったい「何もの」。

人間の「正体」が問題になってくるのは、キリスト教の世界では原人アダムとイブが「イノセンス（無知）」を捨てたときからだ。神の前で自分を意識するようになってからである。「アイデンティティ」が不確かになり、人間は見せることと隠すことを知ることになった。

蛇の誘惑に負けたイブが食べた知恵の木の実はリンゴのように赤かったのだろうか。本書の装丁のアダムとイブの線描画がとてもすばらしい。